

すために、ヘブライ語の文字や全く新たに考案した文字をつけ加えて完成させたのでした。それで、A, E, O, M, T, Cなどのなじみのある文字の他に、Rの音をPで表したり、Nの音をHで表す文字や、全く独特な文字が存在するのです。

変わった文字を使っているといっても、発音までも特殊な訳ではありません。英語では、一つの音を表記するのに、sh, ch, tsのように二つの文字を使う必要がありますが、それらがロシア語では特有の一つの文字で表記されます。母音の数は、日本語と同じものが5つあり、子音は、日本語のチャ、ピャ、ミャ、ニュ、ジュ、リョなどにあたる音が多いのが特徴で、全体としては、意外と整然としています。しかし、日本人が外国語を学ぶときに一番苦勞するのは、何といても子音連続でしょう。ヨーロッパの多くの言語がそうであるように、この点ではロシア語もすさまじい子音連続を誇っています。

ロシア語は、英語、ドイツ語、フランス語などと同じ系統のインド・ヨーロッパ語族に属しています。そのために、一般に文法や語彙の点で、互いに似通ったところが多くみられます。たとえば、その最も典型的な特徴といったら、名詞、代名詞、形容詞などに現れる性、数、格の区別でしょう。主語にたつ名詞の語尾が、aで終われば女性形、oなら中性形、子音なら男性形などというふうに、はっきりと性が区別され、語尾の形を変えることで、修飾関係や主語、目的語がどの語であるかを一目で見分けることができます。一方で、動詞の形式は規則性が一貫していて、他のヨーロッパの諸言語と比べると、時制の区別も簡素です。このように語形変化する言語ですから、動詞や副詞一語だけで文が成立する場合も良くあるのです。

ロシア語の語彙の中には、「兄弟」をbrat、「姉妹」をsestra、「息子」をsyn、「3」をtriというように、英語ともよく類似した語が見られるほか、太古の文化接触によって得られた、イラン系、ゲルマン系、バルト系、そしてトルコ系の沢山の借用語に満ちています。

驚くほど古い要素を今日まで継承しながらも、たえず外来の新しい要素を次々と取り入れて現在に至っています。



母国語しか知らない者は母国語さえ知らない。

これはゲーテの有名な言葉だと言われているが、いったいどういう意味であろうか。もしこの通りだとすれば「日本語しか知らない者は日本語さえ知らない」ということになる。日本人として生まれ日本語を自在にあやつるにもかかわらず、ことによれば「日本語さえ知らない」とはどういうことか？

私たちは中学、高校で英語を勉強してきた。だから英語という外国語と日本語の違いに多少は気づいている。日本語では“腹へった”、“疲れた”と過去形で言うのに、英語では“I am hungry”, “I am tired”と現在形で言うのはなぜか？。英語では主語を省略すると命令文などになり、勝手に主語省略ができない。しかし日

本語では、どうして自由に主語省略ができるのか？。逆に、英語では二重主語文は普通ありえないのに、日本語では“彼は頭がいい”とか“秋はサンマがうまい”などとかなり自由に言えるのはなぜか？。英語では一人称単数代名詞は“I”だけなのに、日本語では“わたし、わたし、僕、俺、あたし、うち、小生……”と多いのはなぜか？。これに類似して英語の“wife”は日本語では“妻、奥さん、奥様、家内、女房、かかあ、ワイフ、嫁さん……”など様々の訳語を便いしなければいけない。一体、日本語ってどんな言葉なの？と言いたくなる。しかも、上のようにたんに単語形態や文法構造だけではない。「発音」や「文字」においても日本語の骨髄は鮮やかである。SUN [sʌn] とかCAPTAIN [kæptain] といった語末 [n] 発音が日本人には難しく、意識しないできるとかならず [sʌŋ] や [kæptainŋ] という [ŋ] の音になってしまう。これは一体なぜか？、あるいは英語やドイツ語、フランス語の文字はアルファベットと呼ばれる一種類しかないのに、なぜ日本語には「平仮名」、「片仮名」、「漢字」という三種類もの文字があるのか。それは……中国語の影響だから……と答えても十分ではない。なぜなら、中国語の文字は漢字一種類しかなく、また日本と同じく中国漢字文化圏に属する韓国・朝鮮では、文字としてはいわゆるハングルがほとんどで一部漢字を用いる。つまり二種類の文字しかなく、ベトナムに至っては現在は一種類のみと言ってよい。なぜ、日本だけがおそらく世界でもっとも多いと思われる三種類もの文字を使う民族となっているのか？ などなど。外国人は言う、「三種類もの文字を憶えなければならない日本語、“I”，や“wife”に対して実に多くの単語数を憶えなければならない日本語！」、「一体、日本語ってどんな言葉なの？」。

つまり私たちは、母国語である日本語の特徴を、外国語を学び外国と比較対照してこそ、初めて知ることができるのである。外国語を全く知らずしては、日本語の何たるかを知らない。あるいは、

外国語を知っていても、それを思い切った視点で自分の国の言葉と比べてみる自由な発想がなくては、やはり白国語の何たるかに気付かないであろう。

大学の教養外国語では、ぜひこうした点を自由に考えてみてほしい。諸君はすでに受験用の外国語勉強という制約から自由にされたのだから。外国語を通じて自分の言葉と、そして自分の国の文化を考えてみてほしい。「言葉は文化を乗せて走る車」と言われるように、つぎには外国の文化と日本の文化を比較する目を大学時代に養ってほしい。それは国際化時代の大学生の必須条件でもあるからだ。

愛知大学での韓国・朝鮮語教育は以上の点を大切な要件として、諸君とともに考えていくことを目指している。「日本語ともっとも近い言語」と言われる韓国・朝鮮語講義は、同時に諸君と“日本語とは何か、日本とは何か”を考える場所でもある。大学における教養外国語、それは他の外国語科目においてと同様、“外国語を通して日本語と日本を知る”という目的にも仕えている。

